東京外国語大学大学院地域文化研究科　平和構築･紛争予防講座（ＰＣＳ）

韓国スタディツアー（2008.2.29～3.4）報告

小峯 茂嗣　　PCS プロジェクト・ディレクター／研究員

2008 年 3 月 10 日

１．スタディツアーの企画経緯

2007 年度、PCS は文部科学省「大学院教育改革支援プログラム（教育 GP）」に採択された。採択事業「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」では、学生の紛争解決・平和構築現場でのフィールド調査促進、支援を行っていくとしており、学生による個別のフィールド調査以外にも、教員が引率し、調査指導を行なう国内外でのスタディツアーの教育上の必要性が明示されている。現地での視察、調査活動、講義受講などにより、PCS 分野の教育効果の向上を図るべく、2007 年度は沖縄（修士 1 年）、韓国（修士 2 年）へのスタディツアーが企画された。

２．韓国スタディツアーの目的

50 年以上にわたる朝鮮半島の分断は、日本を含む極東アジアの潜在的な危機要因である。本スタディツアーでは、同地域における紛争にまつわる地域や施設を視察し、また専門家による講義受講や PCS 分野に取り組む現地学生との交流を促進し、極東アジアの平和と安全保障について学ぶことを目的とする。

３．実施期間

２００８年２月２９日（金）～３月４日（火）

４．引率者

丹羽　泉　　地域文化研究科教授
小峯　茂嗣　PCS プロジェクト・ディレクター／研究員

５．参加者（PCS 修士課程 2 年）

Mr. Kim Kye Hyun, Korea
Mr. Wael Elmeddeb, Tunisia
Mr. Sophean Ung, Cambodia
Mr. Panupong Puttitanun, Thailand
Ms. Anacleta Fernandes, Timor Leste
Ms. Katie Caparula, USA

６．スケジュール

2 月 29 日（金）	9:20 羽田発→11:45 ソウル金浦空港着（JL8831） 13:50～15:00　慶熙大学平和学大学院（Graduate Institute of Peace Studies：GIP）訪問。
3 月 1 日（土） （三一節）	10:00～12:00　戦争記念館訪問 13:30～17:00　ソウル市内見学（延世大学生の協力で小グループ行動）
3 月 2 日（日）	安保観光ツアー参加（8:00～14:00） 坡州・臨津閣→第 3 トンネル→都羅山駅
3 月 3 日（月）	10:00 延世大学校連合神学部・趙載国教授による韓国対人地雷被害問題

	に関する講義の受講（延世大学校ルース・チャペル会議室） 13:30～17:00　京畿道漣川郡の地雷埋設地域視察（案内：趙載国教授、文銀英・韓国対人地雷対策会議事務局長、キム･ギヘ・韓国地雷除去研究所所長）
3 月 4 日（火）	13:00 ソウル金浦空港発→14:55 羽田空港着（JL8832）

7．報告

(1) 慶熙大学平和学大学院（GIP）：2 月 29 日　13:50～15:00

応対者　Dr. Sang Seek Park (Acting Rector)
Dr. Gi Bung Kwon (Visiting Professor / Former Rector)
Dr. Young Seek Choue (Founder-Chancellor)

GIP は 1984 年に設置された。キャンパスはソウル市内でなく、郊外の京畿道（Kyunggi-do）南楊州（Namyangju）市に位置する。

GIP は PCS と同じく英語によって講義が行われている。

訪問当日は、学位授与式と新学期開講式があるにもかかわらず、時間を割いていただき、懇談の時間を持つことができた。GIP 側からは、プロモーションビデオの上映（約 10 分）をもとにプログラムの説明が行われた。PCS からは丹羽教授から講座概要について、日本から持参した資料（PCS のパンフレット、グローバルキャンパスのパンフレット）をもとに口頭で紹介された。また GIP と PCS の学生も交え、相互に質疑応答が行われた。

GIP 側からは、今後も人的交流を続けていきたいという意思を確認した。

参考　Graduate Institute of Peace Studies (GIP), Kyung Hee University
(http://gip.khu.ac.kr/default.asp)

(2) 戦争記念館：3 月 1 日　10:00～12:00

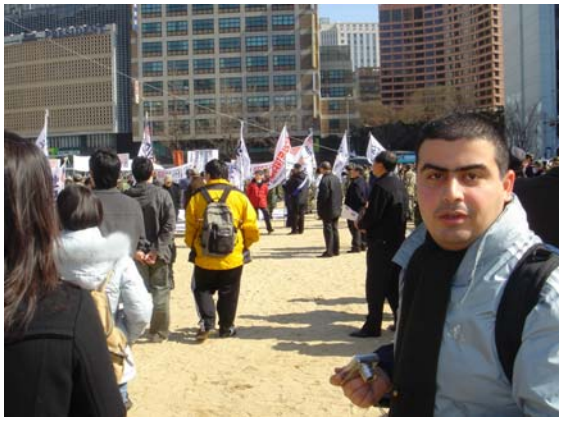
戦争記念館は 1994 年に開館し、韓国（朝鮮半島）の古代から現代までの戦史に関する資料を展示している。展示は、古代・中世、植民地期と独立闘争、朝鮮戦争、ベトナム戦争、軍の国際協力活動（PKO 参加など）のブロックに分かれている。とりわけ朝鮮戦争に関する展示に主眼が置かれており、国防教育の意味合いが強い。

展示室内にあるビデオは韓国語の他に、日本語、英語、中国語が選択でき、展示品の解説も英語が併記されているため、PCS の学生にとっても理解を深めることができたと考える。見学時間は 2 時間設けたが、思いの外、学生たちが熱心に展示を見ていたため、全ての展示を見終わることはできなかった。見学時間は 3 時間確保してもよいかもしれない。

参考　戦争記念館　(http://www.warmemo.or.kr/)

(3) ソウル市内見学：3 月 1 日　13:30～17:00

昼食後、PCS 学生は、延世大学校生の協力で、3 グループに分かれ、ソウル市内散策を行った。この日は「三一節」（1919 年 3 月 1 日に起きた、日本統治に反対する大規模な独立運動を記念する記念日）であり、一部の学生は三一節を記念する行事を見学した。



ソウル市庁前の北朝鮮核開発反対デモを視察

通訳する延世大学生（左）

(4) 安保観光ツアー：3 月 2 日　8:00～14:00

朝鮮戦争休戦後、休戦ラインの内側には、民間人統制線（民統線・幅 5KM-20KM）が設けられ、一般人は休戦ラインに近づくことはできない。しかしながら許可された観光ツアーに参加することで、休戦ラインに近づき、北側を望むことはできる。休戦ラインの南側（韓国側）には、南北の分断を実感できる施設（展望台など）や名所があり、それらを巡るツアーの総称が「安保観光」である。国防教育の意味もあるとのことである。

臨津閣

民間人統制線への門

臨津（イムジン）河を背に

南侵第 3 トンネル

韓国内には、北朝鮮が南側に侵入するために掘られたとされるトンネルが、これまでに 4 本発見されている。今回見学した第 3 トンネルは、1978 年に発見されたものであり、ソウルからわずか 44km の所にあり、板門店の非武装地帯の南方限界線まで 435mのところまで掘られていたものである。

施設には資料館やモニュメントが設置されるなど、一般に開かれたものとなっている。

トンネル内は撮影禁止であった。

対北関係の歴史資料展示

兵士の蝋人形

非武装地帯(DMZ)の模型

統一を祈願するオブジェ

都羅山駅

1904 年、日本は日露戦争の物資輸送のために、漢城（現ソウル）から北朝鮮と中国の国境の新義州までを結ぶ鉄道「京義線」敷設を開始した。53 年、朝鮮戦争が休戦となると、京義線もまた分断された。2001 年、北朝鮮との融和策「太陽政策」を進めた韓国の金大中大統領（当時）は北朝鮮を訪問、金正日総書記と首脳会談を行い、分断されていた京義線の再連結が合意された。そして鉄道連結と並行し、韓国側の民統線地域内に建設されたのが、都羅山（トラサン）駅である。民統線地域内にあるため、今回のようなツアーでなければ行くことはできない。

2007 年 5 月に試運転が行われ、北から南へ列車が通行した。その後の定期運航は行われてはいない。

(5) 対人地雷被害問題に関する講義：3 月 3 日　10:00～12:00

延世大学校連合神学部教授で、NGO「韓国対人地雷対策会議（KCBL）」コーディネーターの趙載国教授により、韓国における対人地雷問題について講義を受けた。

韓国では現在も、毎年数件の地雷事故が発生しており、最近では 2008 年 1 月 25 日に、仁川市江華郡西島面の離島ポルム島にあるヨントゥル海水浴場で男性観光客（56）が地雷とみられる爆発物を踏み、足首を負傷したことが報じられている（朝鮮日報 2008 年 1 月 29 日）。

韓国における対人地雷は、1950 年代の朝鮮戦争時、60～70 年代の南北間の緊張の時期（北朝鮮の対南工作員による朴正熙大統領暗殺未遂事件など）、80 年代後半のソウル・オリンピック前の警戒の時期（ラングーン事件、大韓航空機爆破事件）に停戦ライン沿いや、国内の軍事施設周辺に埋設された。除去されたものもあるが、とくに朝鮮戦争時代の地雷は正確な埋設地域や個数の記録がはっきりせず、大雨による増水や土砂崩れによって移動した地雷によって、民間人が死傷する事故が現在も続いている。

(6) 京畿道漣川郡の地雷埋設地域視察：3 月 3 日　13:30～17:00

　趙載国教授、文銀英・KCBL 事務局長、キム･ギヘ・韓国地雷除去研究所所長の案内で、ソウルからバスで 1 時間半ほど北上し、京畿道漣川郡の地雷原を 4 か所視察した。地雷原は鉄条網で囲われており、ハングルと英語によって「地雷」と記された赤い三角形のプレートが貼られている。

漣川へ向かう

現場で趙教授の説明を受ける

韓国地雷除去研究所キム･ギヘ所長（右）

地雷原を示す標識

地雷原を前に説明を受ける学生

舗装道路のすぐ脇にある地雷原

プラスチック製地雷のサンプル

地雷探知機（金属探知機）の使用体験をする学生

８．留意した点と改善すべき点

(1) 教育事業としての観点から

a) プログラム構成

12 月の着任時点で、スタディツアーの行き先が韓国であることしか決まっておらず、実施までの準備期間が少なかったため（国際シンポジウムの準備と同時並行であった）、現地の下見を行うこともできなかった。そして、2 年間の修士課程で提供する教育サービスの中でのスタディツアーの位置づけが不明確なまま企画を進めざるを得なかった。以上から、訪問先の選定や旅程等は担当者個人な限られた経験と人脈に依存する結果となり、PCS 修士課程の教育プログラム全体の中での調和が必ずしも取れていなかった感がある。

軍事境界線付近の安保観光ツアーなど、既存のパックツアーのコースを利用したが、時間的な制約で、消化不良の感は否めなかった（もっとも軍事的緊張の高い地域であるため、個人旅行ができないのであるが）。ある参加学生からは、観光ツアーに乗っかるよりも、政治家などとのヒアリングなど、独自のプログラムを工夫するとよいだろうという要望があった。たしかに当事者の声を聞く機会が多いほうがいい反面、手配は難しい（時間を要する）だろう。プログラムについて、学生の意見を取り入れるとよいだろうという意見もあった。収拾がつかなくなる可能性は高いが、各学年で「スタディツアー委員」を 2，3 人ほど立ててもらって意見を集約するなどの方策もあると考える。

b) 事前の学習

このようなスタディツアーにおいては、ツアーの目的に沿った実習のテーマや訪問先の情報、国・地域の歴史といった前提となる予備知識を、参加者が共有することが必要である。今回は時間の関係で、関連資料の URL を提示するしかできなかった。

それでも個人レベルでは、それなりに学習していたようであった。

次回以降の学生たちには、引率教員による講義を交えるなどの取り組みや、自主的な勉強会を行っていくように指導したいと考える。そのことによって、前提知識と同時に、ツアーへの目的意識も共有できると考える。

c) 2 年間の修士課程期間におけるスタディツアーの位置づけのあり方

本「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」が提供する教育サービスにおいて、スタディツアーはどのような位置を占めるのであろうか。

教育 GP 申請にあたっては、PCS は「紛争実態へのより深い認識を促し」ていくものとして、フィールド調査やインターンシップを重視する旨が明示されている。現状ではフ

ィールド調査やインターンシップは、各学生が修士論文の研究のために個人的に行っているが、GP 申請にあたり、「教員が引率し、調査指導を行う」ためのスタディツアーも行っていく方針が立てられた。しかしながら PCS として提供する教育サービスとして講義と研究指導がある中で、スタディツアーがどのような位置を占めるのかという明確な定義づけはないまま、今年度のスタディツアーは実行された。たとえば PCS 分野を学び始めたばかりで、海外の現場経験の乏しい学部学生などを対象に行うのだとしたら、そのスタディツアーには現場経験の付与、学習や進路へのインセンティブの付与といった意義がある。しかしながら PCS の学生はその多くが多様な社会経験を持つ留学生であり、しかも紛争経験国の出身の者もおり、何よりも自らの研究テーマを持ってそれを論文とすることによって修士号を取得するという明確な目的意識を持っている。したがって、もしも PCS が施す教育プログラムの中での位置づけが不明確なまま、修士論文の研究テーマとの関連性の乏しい（もしくは全く無い）スタディツアーを行っていったとしたら、ともすれば学生は不要、もしくは負担と受け取る可能性もありうる。

このような状況下、スタディツアーに本学 PCS 講座の教育プログラムとしての位置づけを示し、実施の意義を持たせていくことはできるであろうか。

上述した通り、研究のテーマや目的が明確かつ学生によって多様なことから、講義・研究とスタディツアーを連動させることは困難と考える（たとえばスタディツアー訪問地域や見聞した課題が修士論文のテーマになっていくなどは、実情からは考えにくい）。むしろ PCS 学生はほぼ全員が外国人留学生であることに鑑み、(1)日本を取り巻く紛争と平和の実情や、(2)日本の政府や市民社会による平和構築の取り組みを実地で学べる企画作りが良いのではないか。そこに外国人が「日本で」PCS を学ぶ意義づけにつながるのではないかと考える。

(1)については、日本を含む地域の安全保障と信頼醸成について歴史的沿革から現状の課題、将来の展望を学べるスタディツアーとして行いうる。実施地域としては、海外ならば韓国、中国、台湾、東南アジア諸国、南太平洋諸国などが、また国内ならば沖縄、広島、長崎などが候補としてあげられるであろう。

(2)については、日本の政府や市民社会の平和構築の取組の事例について学べるスタディツアーとして実施しうる。PKO（自衛隊や文民として派遣されている）活動地、JICA の活動地、日本の NGO 活動地のある国・地域が実施地域として検討されうるだろう。ただ安全上の配慮が必要となることは言うまでもない。

以上のような観点から、2008 年度以降のスタディツアーの意義を学生に周知し、その意義に沿ったプログラム作りを行っていくべきと考える。

(2) 渡航準備、諸手続き、運営の観点から

a) 実施時期

今回の韓国スタディツアーは、2 年生を対象に 2 月から 3 月にかけて実施した。しかし準備期間は修士論文の締め切り直前であり、学生たちもツアーのための事前学習に取り組むことは難しい。また就職活動や博士課程進学のための勉強や準備、引っ越し（帰国手続きを含む）などで、学生にとっては多忙な時期であると。何よりこの時期の韓国はまだ寒さが厳しい。したがって、時期としては適当ではないと考える。

では 2 年生に対して、どの時期がスタディツアー実施時期として適切なのであろうか。実施できない、または実施を控えたほうがよい時期から列挙していくと、(1)授業期間中、(2)夏季休業中（修士論文のためのインターン、フィールド調査を行っているため）、(3)修士論文の仕上げ・提出の時期（1 月）、(4)終了直前の就職や進学準備の時期（2 月～3

月）となる。

以上から、唯一実施が可能な時期は、外語祭とその前後の休講時期となり、次年度以降、2 年生のスタディツアーは、その時期に実施すべきと考える。

b) パスポート、ビザ

PCS に所属する学生の大半は、今後も韓国渡航にあたり、ビザが必要となると考える。ビザを必要とする外国人については、事前にチェックしておくこと。申請手続きは大東ツーリストに委託したが、必要書類は、学生自身が用意しなければならない。

ビザ申請に必要な書類

- パスポート（有効期限が出発日から起算して 6 カ月以上）
- 再入国許可証（パスポートに貼付、有効期限が出発日から起算して 3 カ月以上）
- 写真（4.5cm × 3.5cm）1 枚
- 外国人登録証明書のコピー1 部（表と裏の両面）
- ビザ申請書（大使館の書式）

c) 飛行機

羽田空港国際ターミナルは小さいので、混雑が少なく、迷う人は出ない。今後も羽田発着が賢明であると考える。

d) 現地ガイド

大東ツーリストに英語ガイドを頼んだが、日本語ガイドだった。安保観光ツアー時も日本語ガイドのグループに入れられた。次回は英語ガイドを配置するように念を押す。

e) 訪問先の選定とコンタクト

慶熙大学校 GIP は、当初から訪問が計画されていたため、HP などで連絡先を調べて訪問依頼を行った。延世大学校ならびに KCBL は、担当者（小峯）の個人的なつながりをもとに、訪問依頼を打診した。

f) 衣食住

ムスリム、ベジタリアンの学生に対する食事について配慮をする必要がある（機内食も）。

3 月の韓国は、寒いが南国育ちの学生にでも耐えられないほどではない。ただ雪が降って展望台がキャンセルになった。

昼食および夕食は、ツアー会社に任せていた。日本人向けの味付けであったが、韓国を体感する上では、地元民が利用する食堂を使うほうがよいのではという参加学生の意見があり。

g) 現地での移動

現地では、バスをチャーターした。多人数が効率よく移動するためには、適切であったと考える。

h) 通信

日本を出発する前に、現地で使用できる携帯電話をレンタルした。主に、訪問先や協力者との連絡をするために使用したが、時間を有効に使うことができたと考える。また今回は事故や怪我などはなかったが、不測の事態に緊急に対応し、場合によっては日本側と連

絡を行う上で、携帯電話は必携であると考える。

i) 渡航前配布資料

学生には事前に、スタディツアーの目的、内容、スケジュール、宿泊先等を記したレジュメを配布した。その中で、訪問先と関係する南北分断、朝鮮戦争、対人地雷被害問題に関する情報のリンクを紹介した。

j) 体調管理

PCS 学生は海外経験が豊富なので、基本的に自己の体調管理は本人に任せた。ただ温暖な国出身の学生が多いことから、3 月の韓国の気温、気候、服装などの指導を行った。

９．準備から実施に至るまでの経過

12 月　3 日以降、実施スケジュール案を作成。
6 日、丹羽泉教授とスケジュールと日程について打ち合わせ。
14 日、PCS 事務所にて大東ツーリスト高須氏に上記案を提示し、ツアー構成を依頼。
PCS 学生に対し、日程を伝達。
15 日、学生に対し、パスポートのコピー提出の連絡。
20 日、大東よりツアー案がとどく。
27 日、大東に参加者名簿（パスポート標記の氏名）を送付
31 日、延世大学校・趙載国教授に協力依頼を打診（メール）→同日返信を受信。

1 月　4 日以降、PCS 学生向けツアー説明書の作成に入る。
10 日、大東より見積書がとどく。以降、見積もり内容について調整作業続く。
中旬、ビザ申請につき、PCS 学生に対し、パスポート（有効期限 6 カ月以上、再入国許可証の有効期限 6 カ月以上の証紙付のもの）、外国人登録証のコピー（両面）、写真（3.5×4.5cm）1 枚、ビザ申請書を提出するよう伝達。
18 日、PCS 学生に対し、ツアー説明書を送付。
21 日、大東ツーリストから見積書（最終案）が届く。GP 支援室に確認。
31 日、旅費振込に関する委任状、旅費概算請求書を作成、GP 支援室に提出。

2 月　1 日、韓国慶熙大学校 GIP に訪問依頼の打診（メール）。
大東ツーリストに PCS 学生のビザ申請必要書類を持参。
18 日、趙載国教授に地雷問題の講義と視察の詳細を依頼（メール）。同日、返信受信。
JDD ワールドマーケティングに、レンタル携帯電話の申し込み（Web 経由）。
21 日、大東ツーリストから請求書（教職員分）が届き、GP 支援室で処理。
26 日、PCS 学生と渡航前確認ミーティング（13:00～14:00）。
29 日、出発。

3 月　4 日、帰国。
7 日、出張報告書を GP 支援室に提出。

以上